

【責任】

建学の精神である「安んじて事を託さるる人となれ」に基づき、実学重視の商学教育の徹底と、使命感、責任感を持って社会に貢献できる人材育成を担うことが最重要の責任である。

本学の学生が4年間の学士課程教育を経て、「学士（商学）」の学位を授与するためには、所定単位の修得のみならず、以下の資質と能力（ディプロマ・ポリシー：DP）を身につける必要があることを認識している。

1. 知識を取り込む力（知識・理解）

グローバル化した社会で求められる幅広い教養とモラルを身につけ、各学科の基礎となる専門的知識・技能を修得している。

2. 問題発見・解決力（思考・判断）

多様な価値が共存する現代社会が抱えるさまざまな問題を発見、分析し、論理的に思考して解決できる。

3. コミュニケーション力（知識・技能）

グローバル化した社会で多様な価値観をもつ他者の意見に耳を傾け、自分の考えを口頭や文章で表現しコミュニケーションできる。

4. 社会貢献力（態度・意欲・関心）

社会への貢献を志し、良き市民、良きビジネスパーソンとして行動できる。

5. コラボレーション力（態度）

主体的に行動し他者と協働できる。

6. 専門的知識・技能の活用力（思考・判断）

自立したプロフェッショナルとして事を託される場面でその知識・技能を活用できる。

教育・研究職として教育工学とコミュニケーション学を専門領域とし、①初年次必修授業（社会力基礎演習、ICTリテラシー）、②年次以降のゼミナール（コミュニケーション学ゼミ）、チームティーチングで③インターンシップ授業を担当している。授業①では主に、DPの1. 2. 3. 5.の育成を担うことを責任として理解している。授業②はゼミナールであるため、DP4. 6.の専門的知識育成と実社会で活躍できるための知識の転化・深化を目指している。授業③はインターンシップという特徴から、DP4. 5. 6.の育成を責任として、教育活動を行っている。

この他、I Rという教育評価を担う部署を任されている。学生の入学前後の様々なデータを分析し、教育の充実化に資する提案を行うことが求められる。I Rは各部署を跨ぐデータを取り扱い、また大学教育・経営の方針にも参考とされる結果の提示を行う。そのため、日ごろから教職員、部署間の信頼関係の構築を重視している。また、調査実施の際は、客観性、信頼性、中立性の担保を責務としている。

【理念】

「安んじて事を託さるる人となれ」という建学の精神は、実は本学としての教育目標を超越し、たとえどの大学を卒業したとしても、21世紀の地球市民として（citizenship education）、社会人として必要とされる理念に他ならない。安心して事を託されるためには、他者（ひと）から信頼されなければならない。しかし信頼は人間性のみから得られるものではなく、必要十分な知識と経験に裏打ちされて初めて一緒に安心して仕事ができる他者として認めてもらえる。このような理念の解釈から、①実学としての教科知識の定着と、②安心して協働できる行動特性の育成を、より具体的な理念として掲げ、建学精神、DP、理念の一貫性を担保する。

①②の理念は、実は専門とする教育工学、コミュニケーション学の理念と親和性が高い。①の知識定着は、教育工学を応用し、その効率性の追求と定着率の高さを目指すことができる。②の安心感の醸成は、コミュニケーション学を応用し、他者理解と協同するための対話力の育成に貢献することができる。

【方針・方法】

責任を全うし、理念を実現させるために、担当する各授業のインストラクショナル・デザインに、3つの共通する方針を掲げる。具体的には①知識の定着率を向上させる方略の導入、②未知の他者とのコミュニケーション機会の創設、③学習内容・活動の振り返りである。方針①はDP1. 2. 3. 5. ②はDP3. 4. 5. 6.に関連する。方針③はDP1.~6.を総合的に扱うが、振り返りという認知的活動の利点を活かし、自己の学びと社会との接点について考えさせることに重点に置いている（DP4.）。

方針を具現化するための具体的な方法を示す。

方針①の知識の定着では、

- ・知識定着の前段階として、知識を取り入れる力（DP1.）を最重要視し、Academic Study Skillsの習得に力を入れている。特に、情報収集→整理→資料作成→発表→レポート執筆、の一連のプロセスにおいて、各段階で必要とされるスキルは必須と考えている。
- ・知識の定着は、自己の学習に責任（Learner Responsibility）を持ち、自立的に学習を自己管理しなければならない（Autonomous Learning）。そのため、教員が一方的に講義し、受け身的な学習が行われないように、学習者中心の学習活動（Active Learning）を取り入れている（DP3. 5.）。
- ・予習を重視する。前週のうちに授業で扱う教科書、資料の範囲を具体的に提示。効果的に予習ができるように毎回の授業を展開している。
- ・視聴覚資料として、短編の動画を多用している。学習内容が長期記憶に留まるように工夫している。
- ・授業開始直後に、前週の学習内容の定着を確認する小テストやクイズを行う。また予習で得られた知識確認を目的に、ワークシートへの記述や学習者間で対話を行っている。
- ・知識の定着度を具体的な数値（点数）で把握できるように、学期中盤に中間テストを実施している。
- ・小テスト、クイズ、中間テスト後には、即時フィードバックができるように努めている。
- ・学期末には、授業内容を総括し、学部・学科を構成する学問領域における授業内容の位置づけを確認。

学んだ内容の学術的意義と、実社会での職業や業務の実例を紹介することで社会的意義についても確認し、学びの価値を高めることで知識の定着を図っている (DP4. 6.)

方針②の未知の他者とのコミュニケーション機会の創設では、

- ・授業内で多様な他者と対話する機会を意図的に設定している。多様な他者とは、普段話さないクラスメートを意味する。
- ・4~6名で編成されるグループ活動 (Small Group Communication) を取り入れている。グループメンバーは、普段から仲の良い友人と未知の他者が混在して編成されることが多い。その不安定で緊張的な対他者間の関係性は、新卒として実社会で働き始める環境と類似する (DP2.)。
- ・各グループで協同的活動を通じて目標を達成する。目標は具体的にはリサーチ・プレゼンテーション、フィールドワークなどがあげられる。役割の分担、資料の合作、発表の成功は、意見対立の解決、課題完成の締め切り厳守が必要とされるため、責任の自認とお互いの信頼関係なしでは成り立たない。
- ・上述の一連の方法を採用することによって、他者との関係性の中で、責任を持ち、信頼を得ながら目標達成に向かう学習過程が、必ず生じるように授業を設計している (DP3.~6.)。

方針③の学習内容・活動の振り返りでは、

- ・自作の学習ポートフォリオ (Learning Portfolio) を活用し、毎回の授業の終盤に振り返り活動を行っている。学習ポートフォリオは、学習者の内省を促す媒体であるため、学習目標、学習内容と活動の要点、自己のアイデンティティなどを確認させ、それらを認知的に統合させることで、学習の意義を深めている。また研究途中ではあるが、試作のルーブリックを活用して、次段階の目標設定をできるように試行している。
- ・單元ごとに、ポートフォリオ・カンファレンスを行っている。ポートフォリオ・カンファレンスとは、ワークシートやレポートなど授業中の成果物 (返却されたテスト結果なども含む) をもとに、教員と学生が1対1で今後の学習のあり方について話し合う振り返り活動である。少人数授業であればカンファレンスは成り立つが、15人以上の場合は実施が困難になる。そのため、学習の成果物を学生同士で見せ合い、ディスカッションや添削をさせることで、カンファレンス同様の振り返り効果を得られるように工夫している。
- ・卒業後の進路選択に向けて、授業内外の学習と将来の就業との関連が段階的に明確になるように内省を促している。特に初年次生における将来の夢は、だれしも曖昧なイメージであることが多いだろう。しかし特定の職業には特定の国家資格やスコアが必要とされ、それらを取得するためには長期間の授業外自立学習が必須となる。そのため、卒業生含め、実社会で活躍するロールモデルと、特定の職業領域で必要とされる資格、コンピテンシーを合わせて紹介することで、大学での学びと社会貢献の関連について内省できるようにしている (DP4. 5. 6.)。

【評価・成果】

評価 (方針①~③の総合評価として) :

- ・担当授業 (非常勤先含む) の学期末授業評価アンケート (5件法) の総合評価では、全科目で4.2~5.0の評価を得られている。

- ・学期末授業評価アンケートの自由記述では、担当授業で学んだ意義、将来への有用性について、好意的な意見が書かれている
- ・専門領域のコミュニケーション学に関する授業では、履修後、1年、2年経過した後に、自主的に過去の履修生を対象に授業評価を依頼している（長期的学習成果の検証）。2019年度に実施した評価では（N=183）、15問の学習成果に関する設問のうち、「社会的課題についてより自主的に探究するようになった」「他者の多様性により気づくようになった」の項目において、履修1年後より2年後の方が、学習成果をより高く認識していることが分かった。

成果：

方針①知識定着

- ・授業で課された各課題の9割の提出物において、基準点に達している
- ・中間テストの正答率は、単位取得条件の目安となる6割以上に達している
- ・期末レポートでは、15回分の授業内容の要点が適切に整理され、書きまとめられている提出物が多い。提出されたレポートの内、2割程度は、授業内容をさらに発展させて、自学自習でケーススタディを行うなど、質の高いレポートが年々増えてきている

方針②未知の他者とのコミュニケーション

- ・グループワークについて、好意的な意見と、自信がついてきたという授業コメントが増えてきている
- ・学期末プレゼンテーションでは、前学期よりも、後学期の方が、情報収集、整理、資料作成、発表の各段階において、質の向上がみられている。また、チームワークの向上がみられ、その成果はタスクに要する時間の短縮、グループまたはペアで交わされる会話の頻度が増えていることからみてとれる。
- ・グループ内の不和や葛藤について相談を受ける機会がある。これは学習阻害要因として考えられるが、一方で実践的な社会的協同活動の過程では不可避な現象であるともいえる。相談を受けたグループにおいても、発表を無事成功させていることから、多様な他者との間で対話の必要性が生じ、問題解決に至る学習経験を経ていると判断している。

方針③振り返り

- ・後学期に入ると、振り返りをともなう成果物の記述量（文字数）が、前学期と比較して増えていることがわかっている。また、進路に関する記述内容の具体性も増している。具体的には、詳細な資格名称、職業の正式名称が記述できるようになってきている。これらは、授業内では扱っていないものも含まれるため、授業内外に自主的に調べた形跡が学習成果としてみてとれる。
- ・後学期では（恒常的に出席している学生において）、課題提出率が100%に達する課題がある。また、課題を提出期限内に提出できる学生も増えてきている。自己の学習に責任を持ち、学習の意義をより認識した成果の一つとして評価している。

【目標・アクションプラン】

方針①知識定着

- ・授業で課された全ての課題提出物において、基準点に達するようにする。そのためには、要支援学生を早期に発見する手段をみつけ、SAと協力して事前指導の強化を授業内で実施する（2020年4月～）
- ・中間テストの正答率の向上を目指す。そのためには、配点が高い記述式問題対策が要となる。そのため

の練習問題を新たに事前に導入するなど、新規対応を試行する（2020年6月～）

- ・ 期末レポートにおいても、もともとの文章力が弱い学生は記述の質が低くなってしまう。そのため、Academic Writing Skills の育成策を具体的に練り、毎回の授業に導入できる小課題を開発・試行する（2020年4月～）。
- ・ テストなど即時フィードバックすべきものが、2019年度は業務過多のため度々遅れてしまった。1週間以内のフィードバックを目指す（2020年4月～）
- ・ 欧米の大学では批判的思考（Critical Thinking）が重要視されている。卒業後、持続可能な社会の一構成員として、社会的矛盾や社会的課題に在学期間中から目を向けることが重要であるからだ。しかし、現カリキュラムではクリティカルな観点の養成が不足しているように思える。そのため、授業の発展的展開として、本点の不足を補っていききたい（2020年9月～）

方針②未知の他者とのコミュニケーション

- ・ 大半の学生において問題は生じていないが、学習動機が著しく低いためにグループワークに参加しない学生においては、指導を強化する（医師の判断でグループワークに参加できない学生は除く）。（2020年4月～）
- ・ フィールドワークを拒否するなど、極めて例外的な態度をとる学生においては、クラス内で処理するのではなく、早期に必要な担当者、部署に共有し、組織的な学習支援体制の構築を目指す（2020年4月～）

方針③振り返り

- ・ 一部の学生では、授業終盤に行う振り返りの質が高いとは言い難い。振り返りに関する記述の曖昧性と文字数の不足を改善するために、指示文の修正、振り返りを促すためのペアワークの新規導入、振り返りの記述の一部を授業評価の一部に組み込むなど、抜本的な改善策を講じる（2020年4月～）。